

歴代誌第二29-32章「ソロモン以降の回復」

1A 開けられる宮の戸 29

1B 主の宮の聖別 1-19

2B いけにえによる奉仕の用意 20-36

2A 過越の祭り 30

1B 呼びかけ 1-12

2B 種を入れないパンの祭り 13-27

3A 祭司とレビ人への分け前 31

1B 有り余る祝福 1-10

2B 忠実な管理 11-21

4A アッシリヤからの救い 32

1B 戦いの用意 1-8

2B エルサレムの神 9-23

3B 戦勝後の高ぶり 24-33

本文

歴代誌第二 29 章を開いてください。私たちは、ユダ王国の中でソロモン王に次ぐ、最も偉大な歴史を読みます。ヒゼキヤ王の歴史です。歴代誌第二の初めにソロモンが神殿を建設して以来の、驚くべき宗教的刷新が起こりました。人々が自分自身を聖め別ち、主に立ち返り、そして大きな喜びが民から湧き上がり、祭司とレビ人は彼らを祝福しました。この出来事は、ユダの歴史の中で最もどん底に落ちたアハズ王の次の世代に起こったことです。

このことを英語では「リバイバル」と言います。日本語にすると霊的復興です。霊的復興は、最も暗闇の時に、これまでにない輝きと光が差し込む出来事です。世はますます暗くなっているのに、それはそのまま進行しているのに、神の御霊は全く妨げられることなく、ご自分の望むことをことごとく行われます。

そして、ユダの国はバビロン捕囚の時に近づいていますが、ヒゼキヤ、またその後の王たちの歴史は、この世の終わりの原型ともなっています。つまり、これまで以上の悪がはびこり、それが神の民とされている者たちの間でもはびこるのですが、これまで以上にキリスト者が主に仕えます。「また、彼は私に言った。「この書の預言のことばを封じてはいけない。時が近づいているからである。不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。正しい者はいよいよ正しいことを行ない、聖徒はいよいよ聖なるものとされなさい。」(黙示録 22:10-11)」終わりの日に、中間はなくなります。悪者はますます悪くなり、聖なる者はますます聖くなります。

1A 開けられる宮の戸 29

1B 主の宮の聖別 1-19

29:1 ヒゼキヤは二十五歳で王となり、エルサレムで二十九年間、王であった。彼の母の名はアビヤといい、ゼカリヤの娘であった。29:2 彼はすべて父祖ダビデが行なったとおりに、主の目にかなうことを行なった。29:3 彼はその治世の第一年の第一の月に主の宮の戸を開き、これらを修理した。

ヒゼキヤは二十五歳という若さで、王の任務を始めました。その評価は、父アハズと正反対です。「父祖ダビデが行ったとおりに」とあります。アハズは、「父祖ダビデとは違って(28:1)」とありました。そして、「主の目にかなうことを行なった」とありますが、アハズはその反対「主の目にかなうことを行なわず」とあります。アハズやその他のユダの王は、人の目になかったことを行なっていたかもしれませんが。しかし、主の目にならなっていたのか？これは、いつも私たちが心の留めていなければいけないことです。

ヒゼキヤが行ったことは、父を反面教師にしたものです。アハズが、主の宮の戸を閉じました。ヒゼキヤはそれを開きます。アハズがその中の祭具を断ち切りましたが、ヒゼキヤがそれを修理します。そして、ヒゼキヤはこれを治世の第一年の第一の月に行います。彼の心がいかに、主に向けられていたのかがここから分かります。自分が何をすることも、初めに求めるものは何か？祈りか、そして御言葉か？さらに旅行先であっても、日曜日をどのように過ごすのか？教会を探すかどうか？

けれども、ヒゼキヤには宮の修理を急ぐ、もう一つの理由がありました。アッシリヤが、もうすぐ目の前にまでやってきていることです。北イスラエルとシリヤがユダを攻めようとしていました。その時に主に拠り頼まずに、アハズはアッシリヤに拠り頼みました。そのために、アッシリヤはシリヤの都ダマスコを陥落させました。そしてアッシリヤは、北イスラエルの多くの部分を占領して、民を捕虜として連れていきました(2列王 15:29 参照)。サマリヤはまだ倒れていませんが、これも時間の問題です。ヒゼキヤは、こうした一連のことが、主に背を向けたから、主がかつてそう仰っていたとおりの破壊が起こっていることを知っていたからです。だから防備を固めることが先決ではなく、主の宮の修復が先決であることを知っていました。そして、それを緊急に行わなければいけないことを知っていました。

29:4 さらに、彼は祭司とレビ人を連れて来て、東側の広場に集め、29:5 彼らに言った。「レビ人たち。聞きなさい。今、あなたがたは自分自身を聖別しなさい。あなたがたの父祖の神、主の宮を聖別し、聖所から忌まわしいものを出してしまいなさい。29:6 というのも、私たちの父たちが不信の罪を犯し、私たちの神、主の目の前に悪を行ない、この方を捨て去って、その顔を主の御住まいからそむけ、背を向けたからです。29:7 また、彼らは玄関の戸を閉じ、ともしびの火を消し、聖所でイスラエルの神に香をたかず、全焼のいけにえをささげることをしなかったのです。29:8 そこで、主の怒りがユダとエルサレムの上を下り、あなたがたが自分の目で見るとおり、主は彼らを人々のおののき、恐怖、あざけりとされました。29:9 見なさい。私たちの父たちは剣に倒れ、そのため、私たちの息子たち、娘たち、妻たちは、とりこになっています。

午前中お話ししましたが、宮清めには順番があります。まずは自分自身を聖別することです。それから主の宮を聖別することです。それから主の怒りが下っていることを話しています。アハズの時代、シリアとイスラエルが攻めてきただけでなく、エドム人が攻めてきて、人々を捕え移しました(28:18)。ペリシテ人もユダの村落を襲いました。そのために人々の慄き、恐怖、嘲り、また虜となっているのです。

29:10 今、私の願いは、イスラエルの神、主と契約を結ぶことです。そうすれば、主の燃える怒りが私たちから離れるでしょう。29:11 子たちよ。今は、手をこまねいてはなりません。主はあなたがたを選んでご自分の前に立たせ、ご自分に仕えさせ、ご自分のために、仕える者、香をたく者とされたからです。」

主との契約とは、モーセを通して神が命じられたことです。この契約を更新することだ、と言っています。そして、民が主に仕えるために初めに動かなければいけないのは、祭司とレビ人です。そこであなたがたを立たせているのだ、とヒゼキヤは彼らを鼓舞しています。

29:12 そこで、レビ人は立ち上がった。ケハテ族からはアマサイの子マハテとアザルヤの子ヨエル、メラリ族からはアブディの子キシユとエハレルエルの子アザルヤ、ゲルシオン族からはジマの子ヨアフとヨアフの子エデン、29:13 エリツァファン族からはシムリとエイエル、アサフ族からはゼカリヤとマタヌヤ、29:14 ヘマン族からはエヒエルとシムイ、エドトン族からはシエマヤとウジエルであった。

歴代誌は、特にレビ人の働きに注目しています。バビロン捕囚後に、彼らの奉仕を中心としてユダヤ民族の礼拝生活を確立するという意図があり、さらにその礼拝において、王なるメシヤを待望するようになったからです。私たち教会も基本的に同じです。キリストからの賜物が与えられ、御霊の賜物が与えられ、その礼拝を確立することによって初めて、キリストが王であることを体現することができます。

29:15 こうして、彼らは自分の兄弟たちを集め、身を聖別して、主のことばによる王の命令のとおり、主の宮をきよめに来た。29:16 祭司たちが主の宮の中にはいって、これをきよめ、主の本堂にあった汚れたものをみな、主の宮の庭に出すと、レビ人が受け取って外に持ち出し、キデロン川へ持って行った。

主の本堂、すなわち聖所は祭司のみが入ることができます。そこにある汚れたものを祭司が取り出し、レビ人が今度はそれを、東の門の外にある、神殿の丘とオリーブ山との間にあるケデロンの谷に捨てていきました。

29:17 彼らは第一の月の一日に聖別し始めた。その月の八日に主の玄関にはいり、八日間にわたって主の宮を聖別した。第一の月の十六日に終わった。29:18 そこで、彼らは中にはいって、ヒゼキヤ王のところに行って言った。「私たちは主の宮を全部きよめました。全焼のいけにえの祭壇とそのすべての器具、並べ供えるパンの机とそのすべての器具をきよめました。29:19 また、アハズ王が、その治世に、不信の罪を犯して取り除いたすべての器具を整えて、聖別しました。ご覧ください。それらは主の祭壇の前にあります。」

彼らがものすごく急いで、これらのことを行なったことを伺えます。それでも、主の本堂の中にあった忌むべきものを取り出すのに八日を費やしています。さらに、本堂の外にある内庭にあるものを取り出すのに八日かかりました。そのほか、祭具で断ち切られたもの、壊されていたものを修復しました。

2B いけにえによる奉仕の用意 20-36

29:20 そこで、ヒゼキヤ王は朝早く、この町のつかさたちを集め、主の宮に上って行った。

ヒゼキヤは、間髪入れていません。次の日の朝早く動き、エルサレムの町のつかさたち、責任者たちを集めています。

ところで、ヒゼキヤがなぜ、父アハズがこんなに悪者だったのにこれだけ抜本的な改革ができたのかと思われるかもしれません。想像するに、父が残したものがあまりにも酷くて反面教師になっているものと思われる。罪を犯すとどんな酷いことになるのか、それを彼は父を見て嫌になるほど分かっていたのでしょう。罪は外から見れば慕わしいものに見えますが、その実は酷いものです。そして、後で出てきますが、ヒゼキヤには恩師がいました。預言者イザヤです。イザヤという教師によって、彼は主の律法から少しも逸れはいけないことを知っていたのでした。

29:21 彼らは、王国と聖所とユダのための、罪のためのいけにえとして七頭の雄牛、七頭の雄羊、七頭の子羊、七頭の雄やぎを引いて来たので、彼は祭司であるアロンの子らに命じて、主の祭壇の上でいけにえをささげさせた。29:22 彼らが牛をほふり、祭司たちがその血を受け取って、祭壇に注ぎかけた。ついで雄羊をほふり、その血を祭壇に注ぎかけた。ついで子羊をほふり、その血を祭壇に注ぎかけた。29:23 それから、彼らは王および集団の前に、罪のためのいけにえとする雄やぎを引いて来て、それらの上に自分たちの手を置いた。29:24 それから、祭司たちはこれらをほふり、その血を祭壇にささげて、罪のためのいけにえとし、全イスラエルのために贖いをした。全焼のいけにえと罪のためのいけにえを、王が全イスラエルのために命じたからである。

エルサレムにいるつかさたちを集めることによって、全イスラエルを代表してもらい、罪を清めるいけにえを捧げました。七は神の数字で完全数ですが、牛七頭、羊七頭、子羊七頭、そして山羊七頭です。最後の山羊のいけにえにおいて、祭司たちは手を置き祈っています。これはその動物と自分を一体化させている儀式です。つまり、山羊が屠られることによって、自分自身の罪が罰せられている、死に値する罪であったことを告白しています。

29:25 さらに、彼は、ダビデおよび王の先見者ガド、預言者ナタンの命令のとおり、レビ人にシンバルと十弦の琴と立琴を持たせて、主の宮に立たせた。この命令は主から出たものであり、その預言者たちを通して与えられたものだからである。29:26 こうして、レビ人はダビデの楽器を手にし、祭司はラッパを手にして立った。29:27 そこで、ヒゼキヤは全焼のいけにえを、祭壇でささげるよう命じた。全焼のいけにえをささげ始めた時に、主の歌が始まり、ラッパがイスラエルの王ダビデの楽器とともに鳴り始めた。29:28 全集団は伏し拝み、歌うたいは歌い、ラッパ手はラッパを吹き鳴らした。これらはみな、全焼のいけにえが終わるまで、続いた。29:29 ささげ終わると、王および彼とともにいたすべての

者はひざをかがめ、伏し拝んだ。29:30 ヒゼキヤ王とつかさたちが、ダビデおよび先見者アサフのこゝろをもって主をほめたたえるようにレビ人に命じると、彼らは喜びつつほめたたえた。そして、一同はひざまずき、伏し拝んだ。

全焼のいけにえを行っている時に、レビ人が賛美をし続けています。これはちょうど、教会の特別な集会において、人々がキリストに自分自身を捧げる決意をしている中で、賛美奉仕者が音楽を奏でているのと似ているでしょう。詩篇の中に、その歌の中で全焼のいけにえを捧げると告白している箇所がいろいろあります(例:詩篇 51:19、20:3)。

29:31 そのようなことのあとで、ヒゼキヤは言った。「今、あなたがたは主に身をささげました。近寄って来て、感謝のいけにえを主の宮に携えて来なさい。」そこで集団は感謝のいけにえを携えて来た。心から進んでささげる者がみな、全焼のいけにえを携えて来た。29:32 集団が携えて来た全焼のいけにえの数は、牛七十頭、雄羊百頭、子羊二百頭であり、これらはみな、主への全焼のいけにえであった。

全焼のいけにえは、王たちが、また祭司たちが予め彼らのために備えていたものですが、今、それだけでなく感謝のいけにえを捧げてください、とヒゼキヤが促しています。まったく自発的ないけにえです。すばらしいですね、私が、献金の時間の時に「献金は感謝の表れです」とよく話しますが、決して誤った印象を持ってほしくないのは、「捧げなければいけない」という心理的圧力を与えてしまうことです。献金は本質的に私が頼まなくても、「捧げたいのですが」と申し出てくれるぐらいの、自ら進んで捧げるものだからです。

29:33 また、聖なるささげ物は、牛六百頭、羊三千頭であった。29:34 ただ、祭司たちは、少なかったので、すべての全焼のいけにえの皮をはぎ尽くすことができなかった。そこで、彼らの兄弟に当たるレビ人が、その仕事を終え、祭司たちが身を聖別し終わるまで、彼らに加勢した。レビ人は、祭司たちよりも直ぐな心をもって、身を聖別したからである。29:35 また、多くの全焼のいけにえ、その全焼のいけにえに添える和解のいけにえの脂肪、注ぎのぶどう酒。こうして、主の宮の奉仕の用意ができた。

祭司たちが捧げることのできたいけにえは、32 節で読んだように「牛七十頭、雄羊百頭、子羊二百頭」でしたが、実は、集団はもっと携えてきていたのです。「牛六百頭、羊三千頭」とあります。いけにえを解体する、その奉仕の手が少なかったのです。

ここで驚くべきことが起こります。祭司ではないレビ人、すなわちアロン系ではないレビ人がその解体の奉仕に加勢をしていることです。祭司と同じような聖別のための儀式を終えたレビ人が、いました。しかも、祭司よりもそれを早く行っていました。霊的復興の時には、このようなことがしばしば起こります。通常では行ってはいけないことであっても、神の御霊が強く働く時に、その働きを行う奉仕者が足りないの、神が起こしてくださる人々がいます。

例えば、女性の伝道者です。教会開拓においても、女性が始めるという現象が、例えば教会史にお

いても類を見ない霊的覚醒が起こっていた中国では起こってきました。私自身は、男が教会を治めるべきで、女が教えてはいけないというテモテ第一 2 章の言葉を信じています。けれども、そのことよりも村全体が福音を聞くことを待っているのに、誰も働き人がおらず、一人の姉妹の福音宣教によって人々がことごとく悔い改め、イエスを信じ、バプテスマを受けるという神の御霊の働きがある時があります。その人が女性だからと言って、退けてはいけません。男が立てられる時まで彼女が神に用いられているのです。

そして、最後 35 節に、「こうして、主の宮の奉仕の用意ができた」とあります。これまでは奉仕ではなく、奉仕をするための用意でした。つまり、自分の身を聖別することが奉仕の用意だったのです。

29:36 ヒゼキヤとすべての民は、神が民のために整えてくださったことを喜んだ。このことが即座に行なわれたからである。

ヒゼキヤと民が即座に動きました。けれども、彼ら自身は神が民のために整えてくださったことを喜んでいますが、自分たちは動いているのですが、自分たちの志に神が働いてくださったことを強く自覚していたからです。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。(ピリピ 2:13)」

2A 過越の祭り 30

そして主に対する奉仕として、ヒゼキヤが呼びかけたのが「過越の祭り」です。イスラエルがイスラエル足らしめる、エジプトから神によって贖い出されたことを記念する祭りです。ソロモンは自分の建てた神殿において、この祭りも含めて行うように意図していました(8:13 参照)。けれども、後に書いてありますが、ずっとないがしろにされていたのです。

私たちキリスト者にとって、最も厳粛な礼典である「聖餐式」がこれに当たります。実に、主が十字架につけらえる最後の晩で食事をしていたのが、過越の食事でありました。イスラエルの民がエジプトから救い出されるのは、私たちがこの世から救い出されて神のものとなったことを記念します。子羊の血を流して、それを家の門柱と鴨居につけるのは、キリストが十字架に付けられて血を流されたことを意味します。この小羊のいけにえによって、この世の神であるサタンが、パロが紅海で溺れ死んだのと同じように滅ぼされた、すなわち無力化されたのです。

1B 呼びかけ 1-12

30:1 さて、ヒゼキヤは全イスラエルとユダに使いを遣わし、またエフライムとマナセに手紙を書いて、エルサレムにある主の宮に来て、イスラエルの神、主に過越のいけにえをささげるよう呼びかけた。

ヒゼキヤの宗教改革において、驚くべきことは、ユダのみならずイスラエルにも主に立ち返ることを呼びかけていることです。実は、北イスラエルから人々がエルサレムに来るのはこれが初めてではありません。ソロモンの死後、ヤロブアムが北イスラエルで王となり金の子牛の礼拝、それから祭司を自分勝手に宛がったことによって、不満に思ったレビ人たちがエルサレムに移り住み、主を求めようと心

に定めた人々もユダに上ってきています(11:13-16)。そして、アサの時代にも同じように一部の者たちが下ってきました(15:9)。

神の教会も同じです。一致が与えられるためには、物理的な一致ではなく、御霊による一致です。相手に合わせるのではなく、主ご自身に聖別すること、主ご自身に合わせるのです。そうすれば、主が一つにしてくださいます。

そして今、ヒゼキヤがエフライムとマナセに呼びかけていますが、この時、すでにアッシリヤが北イスラエルのかなりの部分を占領していて、実はこの三・四年後、紀元前 722 年にアッシリヤがイスラエルの首都サマリヤを陥落せしめます。このような危機的状況の中で、ただ主のみを求めることによって、アッシリヤ捕囚においても神が良くしてくださることを訴えます。

30:2 王とそのつかさたちとエルサレムの全集団は、第二の月に過越のいけにえをささげようと決議した。30:3 というのは、身を聖別した祭司たちは十分な数に達しておらず、民もエルサレムに集まっていなかったため、そのときには、ささげることができなかったからである。30:4 こうして、王と、全集団がこれを正しいと見たので、30:5 彼らはベエル・シェバからダンに至るまで、全イスラエルにおふれを出し、上って来て、エルサレムでイスラエルの神、主に過越のいけにえをささげるよう呼びかけることに決定した。しるされているとおりにささげる者が、多くはいなかったからである。

ヒゼキヤが第一の月に宮清めを行い、それが十六日かかったことを思い出してください。さらに、いけにえを捧げる時もありました。過越の祭りは、第一の月の十四日に行います。それで一か月ずらしたのです。この一か月の延長も、実は民数記に記されていることであって、死体に触ったとかの理由で身を清めていないような時など、第二の月の十四日にしなさいという掟があります(民数 9:11)。

30:6 そこで、近衛兵は、王とそのつかさたちの手紙を携えて、イスラエルとユダの全土を歩き巡り、王の命令のとおりに行った。「イスラエルの人たちよ。アブラハム、イサク、イスラエルの神、主に立ち返りなさい。そうすれば、主は、あなたがたに残された、アッシリヤの王たちの手をはなれた者たちのところに、帰って来てくださいます。30:7 あなたがたは、父祖の神、主に対して不信の罪を犯したあなたがたの父たち、兄弟たちのようになってはいけません。あなたがたが自分の目で見ているとおりに、主は彼らを恐怖に渡されたのです。30:8 今、あなたがたは、自分の父たちのようにうなじのこわい者であってはなりません。主に服従しなさい。主がとこしえに聖別された聖所にはいり、あなたがたの神、主に仕えなさい。そうすれば、主の燃える怒りがあなたがたから離れるでしょう。30:9 あなたがたが主に立ち返るなら、あなたがたの兄弟や子たちは、彼らをとりこにした人々のあわれみを受け、この地に帰って来るでしょう。あなたがたの神、主は、情け深く、あわれみ深い方であり、もし、あなたがたが主に立ち返るなら、あなたがたから御顔をそむけるようなことは決してなさいません。」

ユダの人たちにも同じ手紙でしたが、書かれていることは北イスラエルの人々のことを主に考えて書いています。今でも遅くはない、主が帰ってきてくださると慰めています。そして、「うなじのこわい者であってはなりません」と警告しています。こんな恐怖を目の前で見ながら、なお主に対して頑なになっ

てはいけないと戒めています。私たち人間は、目の前で見ているのに、それでも主を信じないという頑なな存在です。

30:10 こうして、近衛兵は、エフライムとマナセから、ゼブルンの地に至るまで、町から町へと行き巡ったが、人々は彼らを物笑いにし、あざけた。30:11 ただ、アシェル、マナセおよびゼブルンのある人々はへりくだって、エルサレムに上って来た。30:12 また、ユダには、神の御手が臨み、人々は心一つにして、主のことばのとおりによりに王とそのつかさたちの命令を行なった。

三つの反応がありました。北イスラエルでは二つの反応、物笑いと嘲り、それとへりくだり、です。ユダには神の御手が臨んで、一つにしてくださいました。北イスラエルの反応は、典型的でしょう。私たちが福音を伝えれば、この二つに分かれます。「お前は、何を戯けたことを言っているのだ。」という嘲りと物笑い、それとも、聖書の言葉を神からのものだと真剣に受け止め、確かに受け入れなければいけないと決断する人の二手に分かれます。

2B 種を入れないパンの祭り 13-27

30:13 こうして、多くの民が第二の月に、種を入れないパンの祭りを行なおうとエルサレムに集まった。おびただしい大集団であった。30:14 彼らは立ち上がり、エルサレムにあった祭壇を取り除き、すべての香の壇を取り除いて、キデロン川に投げ捨てた。

過越の祭りと共に、種なしパンの祝いが七日間続きます。この時はパン種がイスラエルの中にあってはならない、と定められています(出エジプト 12:16-20)。これは、教会にとっては、キリストが流された血によって罪が一切取り除かれたことを思い起こすものです。そして、この種無しパンの祝いの時に、まだ残っていたエルサレムにある異教の祭壇と香壇を取り除き、キデロン川に捨てます。

30:15 そして、第二の月の十四日に、過越のいけにえをほふった。祭司とレビ人は恥じて身を聖別し、全焼のいけにえを主の宮に携えて来た。

祭司とレビ人が身を恥じて身を聖別しています。これは、やってきた大集団が立ち上がって、残されていたエルサレムの異教の物を取り除いたからです。リバイバル、霊的復興です。御霊の働きが強いので、普段は人々を導いている者たちが恥じるほどに、彼らが主に仕え、従っていきます。

30:16 彼らは、神の人モーセの律法に従って、おのおのその定めのある場所に立った。祭司はレビ人の手から受け取った血を注いだ。30:17 集団の中には、身を聖別していなかった者が多かったので、レビ人が、きよくないすべての人々のために、過越のいけにえをほふる役目につき、これを聖別して主にささげた。30:18 民のうち大ぜいの者、すなわち、エフライムとマナセ、イッサカルとゼブルンの多くの者は、身をきよめておらず、しかも、しるされているのと異なったやり方で、過越のいけにえを食べてしまったので、ヒゼキヤは、彼らのために祈って言った。「いつくしみ深い主よ。このことの贖いをしてください。30:19 彼らは、心を定めて神、彼らの父祖の神、主を求めたのですが、聖なるもののきよめのとおりにはいたしませんでした。」30:20 主はヒゼキヤの願いを聞かれ、民をいやされた。

北イスラエルの人々は、非常に長いこと、レビ人による律法の教えを聞いていませんでした。また、エルサレムでの礼拝を行っていませんでした。ですから、初心者です。心は主に向いていますが、死体に触れていたりとか、身を清めていませんでした。そこで、レビ人が代わりにしてあげていたのですが、それでも間に合わず、身を清めないまま肉に預かっている人々が出てきました。また、火で焼くのではなく、煮て食べてしまったのでしょうか、記されているのと異なる方法で食べた人たちもいました。

ヒゼキヤの祈りが素晴らしいです。これらの掟は決してないがしろにはいけませんが、そのようになってしまったとき、神は彼らの心を見てくださいということ。割礼も受けておらず、律法も守っていない異邦人の救いについて、使徒ペテロがこう言いました。「そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。(使徒 15:8-9)」

30:21 こうして、エルサレムにいたイスラエル人は、大きな喜びをもって七日の間、種を入れないパンの祭りを行なった。レビ人と祭司は、毎日、主に向かって強い調べの楽器をかなで、主をほめたたえた。30:22 ヒゼキヤは、主の務めによく通じているすべてのレビ人の心に語りかけた。そこで彼らは、和解のいけにえをささげ、彼らの父祖の神、主に告白をしつつ、七日間、祝いの食物にあずかった。

何をしなければいけないか、よく務めに通じているレビ人に語りかけました。それで、主への音楽を奏でつつ、和解のいけにえを捧げました。和解のいけにえは、主との交わりを表すので、一部は自分たちが食べるものです。また、彼らは主に、自分たちの罪と過ちを告白することを忘れませんでした。

30:23 それから、全集団は、あと七日間祭りを行なうことを決議し、喜びをもって七日間、祭りを行なった。30:24 ユダの王ヒゼキヤは集団に一千頭の雄牛と七千頭の羊を贈り、つかさたちは集団に雄牛一千頭と羊一万頭を贈り、多くの祭司は身を聖別した。30:25 こうして、ユダの全集団と祭司とレビ人、およびイスラエルから来た全集団、イスラエルの地から来た在留異国人、ユダに在住している者たちは、喜んだ。

素晴らしいですね、主への喜びが沸き起こったので、通常の七日ではなくてさらに七日延長しています。王またつかさたちが、民のためにいけにえを用意しました。祭司の家系のもので、まだ聖別しなかった者たちがさらに聖別しました。そして、ユダの人々だけでなく、イスラエルから来た全集団が、在留異国人に至るまで喜びに満たされています。

30:26 エルサレムには大きな喜びがあった。イスラエルの王、ダビデの子ソロモンの時代からこのかた、こうしたことはエルサレムになかった。30:27 それから、レビ人の祭司たちが立ち上がって民を祝福した。彼らの声は聞き届けられ、彼らの祈りは、主の聖なる御住まい、天に届いた。

ソロモンの時代以降の御霊の喜びです。アハブ時代のどん底から、最高の状態にまで引き上げられました。祭司たちも、彼らの務めの一つである祝福を行っています。そして驚くことは、地上の神殿ではなく「聖なる御住まい、天」に届いているということです。こここそが、主が祈りを聞いておられるとこ

ろです。後に、キリストにあつてこの祈りの特権を教会に与えられます。そのまま天に届く祈りを与えてくださいました。

3A 祭司とレビ人への分け前 31

1B 有り余る祝福 1-10

31:1 これらすべてのことが終わると、そこにいた全イスラエルは、ユダの町々に出て行き、石の柱を打ちこわし、アシェラ像を切り落とし、全ユダとベニヤミンの中から、エフライムとマナセの中から、高き所と祭壇を取りこわして、絶ち滅ぼした。そして、イスラエル人はみな、おのおのその所有地、それぞれの町へ帰って行った。

霊的復興の特徴は、先ほどから見ている通り、一般の民が主に仕えているということです。一部の霊的指導者が導く以上に、彼らが御霊に強く促されて主に従います。ここでは、祭りの帰宅途中、そこら辺にある偶像を取り除いて帰っていきました。ヒゼキヤまた、後にヨシヤがこのことを断行しますが、王の命令なしに自ら主に従っていったのです。

31:2 ヒゼキヤは、祭司とレビ人の組を定め、祭司とレビ人に、それぞれその奉仕に応じて、おのおのの組ごとに、全焼のいけにえと和解のいけにえをささげさせ、さらに、主の宿営の門で仕え、感謝し、ほめたたえさせた。31:3 また、主の律法にしるされているとおりに、朝夕の全焼のいけにえ、安息日、新月の祭り、例祭ごとにささげる全焼のいけにえのため、王の分は王の財産から出した。

祭りの後は、かつてのソロモンと同じように、日課の奉仕に就かせました。

31:4 さらに彼は、エルサレムに住む民に、祭司とレビ人の分を与えるように命じた。祭司とレビ人が主の律法に専念するためであった。

祭司たちは、自分たちの町がありますが、自分たちの生活のための放牧地もあります。けれども、彼らがそのことで思い煩わないようにするために、ヒゼキヤは、エルサレムに住んでいる者たちに支えるように命じたのです。使徒行伝でも、使徒たちが祈りと御言葉に専念するために、給仕を七人の執事に任せた場面があります。それと同じ考えです。ところが、ヒゼキヤ以上にイスラエルの民はこの強い思いを持っていました。

31:5 この命令が広まるとともに、イスラエルの人たちは、穀物、新しいぶどう酒、油、蜜など、すべての野の収穫の初物をたくさん持って来た。彼らはすべてのものの十分の一を豊富に携えて来た。31:6 ユダの町々に住むイスラエルと、ユダの人たちもまた、牛や羊の十分の一と、彼らの神、主に聖別した聖なるささげ物の十分の一を携えて来て、あちらこちらに山と積んだ。31:7 第三の月に、彼らは積み始め、第七の月に終わった。31:8 ヒゼキヤとつかさたちは、はいつて来て、積んだ山を見、主とその民イスラエルをほめたたえ、祝福した。31:9 それから、ヒゼキヤは、その積んだ山について、祭司とレビ人に説明を求めた。31:10 すると、ツァドクの家のかしら、祭司アザルヤが彼に答えて言った。

「人々が奉納物を主の宮に携えて来始めてから、食べて、満ち足り、たくさん残りました。主が御民を祝福されたからです。その残りがこんなにたくさんあるのです。」

律法の中に、十分の一の収穫を捧げなさいという命令があります。それは、レビ人に渡り、そしてレビ人自身も、祭司のために十分の一を捧げなさいと命じられています。あまりにも収穫が多くて、その量が並々ならぬものとなってしまいました。第三の月、六月あたりから、第七の月、十月あたりまで、間髪を入れずに収穫が続いていたのです。主が、彼らの声を天で聞いてくださったと先ほどの章の最後に書いてありましたが、その答えがこれです。モーセが神の約束をこう告げていました。「主が、あなたに与えるとあなたの先祖たちに誓われたその地で、主は、あなたの身から生まれる者や家畜の産むものや地の産物を、豊かに恵んでくださる。主は、その恵みの倉、天を開き、時にかなって雨をあなたの地に与え、あなたのすべての手のわざを祝福される。(申命 28:11-12)」

2B 忠実な管理 11-21

そしてさらに優れているのは、この残った奉納物を、ヒゼキヤが無駄にすることなく配分していくことです。

31:11 そこで、ヒゼキヤが主の宮の脇部屋を整えるよう命じたので、彼らは整えて、31:12 その奉納物と十分の一と聖なるささげ物を忠実に携え入れた。彼らを指図したつかさは、レビ人カナヌヤであり、その兄弟シムイは、副指揮者であった。31:13 エヒエル、アザズヤ、ナハテ、アサエル、エリモテ、エホザバデ、エリエル、イスマクヤ、マハテ、ベナヤは、ヒゼキヤ王と神の宮のつかさアザルヤの任命によって、カナヌヤとその兄弟シムイを助けて、管理者となった。

十分の一の捧げ物で残された物は神殿の脇部屋に入れました。大事な言葉は、「忠実に携え入れた」であります。

31:14 また、レビ人イムナの子コレは東の門の門衛であったが、神に進んでささげるささげ物をつかさどり、主の奉納物と最も聖なるささげ物を分配した。31:15 彼の下には、エデン、ミヌヤミン、ヨシュア、シェマヤ、アマルヤ、シェカヌヤがいて、忠実に祭司の町々にとどまり、彼らの兄弟たちに、各組にしたがい、上の者にも下の者にも分配した。31:16 ただし、三歳以上の男子で、すべて毎日の日課として、組ごとに任務につき奉仕に当たるために、主の宮にはいる者として系図に載せられた人々は、別であった。31:17 父祖の家ごとに祭司として系図に載せられた者、および、二十歳以上のレビ人で系図に載せられた者で、組別にその任務につく人々も別であった。31:18 また、全集団のうち、すべて系図に載せられた幼児、妻たち、息子たち、娘たちに分配した。彼らは、聖なるささげ物を、忠実に、聖なる物として扱ったからである。31:19 おのおの町の放牧地の野にいたアロンの子らである祭司たちのためには、どの町にも、その名の示された者たちがいて、祭司たちのすべての男子、および、レビ人ですべて系図に載せられている者に、その受ける分を与えた。

十分の一以外の自発的な捧げ物(レビ 7:14)についての配分です。祭司と言っても、神殿でいつも奉仕している訳ではありません。組ごとに分かれていて順番に奉仕を行うことを以前、学びました。そして祭司の家があります。その者たちも余りなく、これらの捧げ物が分け与えられました。系図に記さ

れている限り、与えられたのです。

ここに、ヒゼキヤの心が二つの面で表れています。一つは、主に捧げられた物を決して無駄にしない、しっかりその目的通りに使う、ということです。これは、なかなか難しいです。救援物資が来ても、それが被災者にどれだけ万遍なく配布されるか、ということを考えると想像できると思います。けれども、これは主から与ええたものだから、ということで忠実に行いました。もう一つは、ヒゼキヤは祭司とレビ人をしっかり物質面で支えることは、主を礼拝することを大事にすることだと知っていました。先に話したように、使徒たちは祈りと御言葉に専念できるように、七人の執事が給仕についたのです。そしてパウロは、福音の奉仕者は物質による報酬を受けるのが権利であると言いました。

31:20 ヒゼキヤはユダ全国にこのように行ない、その神、主の目の前に、良いこと、正しいこと、誠実なことを行なった。31:21 彼は、彼が始めたすべてのわざにおいて、すなわち、神の宮の奉仕、律法、命令において神に求め、心を尽くして行ない、その目的を果たした。

29章から31章までのまとめです。すべてが、主の目に良いこと、正しいこと、そして誠実あるいは真実なことを行ないました。具体的には、神の宮の奉仕、そして律法と神の命令です。そして、これらの正しいことを行なった後でという、32章1節の言葉が生きたものになります。

4A アッシリヤからの救い 32

1B 戦いの用意 1-8

32:1 これらの誠実なことが示されて後、アッシリヤの王セナケリブが来て、ユダにはいり、城壁のある町々に対して陣を敷いた。そこに攻め入ろうと思ったのである。

これは矛盾しているように見えます。ヒゼキヤが抜本的な宗教改革をしている中で、アッシリヤの王は引き下がるところかユダに入ってきました。ヒゼキヤが王となってから四年目に、サマリヤが陥落します。そして、ユダの町々を攻めてきます。そしてエルサレムに向かおうとしていました。

このことを見れば、「神に仕えている人にも、悪いことが起こるのか？」と思うかもしれません。それで、数多くの人が信仰の試練を受けて、信仰から離れてしまっています。こんなことなら神から離れたほうがまだ、と思うのです。しかし、その考えは間違っています。第一に、確かに主に従っているからこそ、反対の勢力が現れるのです。これは、自分が神から嫌がらせを受けているのではなく、神に反対する者が反対しているのです。そして第二に、主はこの反対者をも動くのを許されます。そして、神がむしろその敵から救い出される大いなる御業を見てほしいと願っているから、許されるのです。覚えていますか、イスラエルの民がエジプトで奴隷状態でしたが、モーセが来てからその虐待がひどくなりました。そしてエジプトに十の災いを下します。そしてイスラエルが出ていったと思いきや、紅海のところに宿営させて、エジプトの軍勢が追いかけるように仕向けたのです。それは、そのエジプトが紅海に沈むのをイスラエルに目撃してほしかったからです。

32:2 ヒゼキヤは、セナケリブが攻め入って、エルサレムに向かって戦おうとしているのを見たので、
32:3 彼のつかさたち、勇士たちと相談し、この町の外にある泉の水をふさごうとした。彼らは王を支持した。32:4 そこで、多くの民が集まり、すべての泉と、この地を流れている川をふさいで言った。「アッシリヤの王たちに、攻め入らせ、豊富な水を見つけさせてたまるものか。」32:5 それから、彼は奮い立って、くずれていた城壁を全部建て直し、さらに、やぐらを上に上げ、外側にもう一つの城壁を築き、ダビデの町ミロを強固にした。そのうえ、彼は大量の投げ槍と盾を作った。

有名な、「ヒゼキヤの地下水道」です。当時の世界は、泉があるところに町がありました。エルサレムも例外ではなく、ギホンの泉がありました。けれども、ギホンの泉はケデロンの谷底にあるため、そこまで城壁を伸ばすことはできず、城壁の外にあります。それを城壁の中に取り組む水道がエブス人の時からありました。そこをダビデが奪取します。ところが、アッシリヤが包囲する時に、その泉そのものが町の中に入らないようにされてしまいます。そうすれば、たちまちエルサレム住民は死に絶えなければいけません。そこで泉を上から見えないように塞ぎました。そして地下水道を町の中に伸ばしたので、そしてシロアムの池まで伸ばしました。当時の地下水道を、今も私たちは通過できます。今でもギホンの泉からの水が流れています。

32:6 彼は、民の上に戦時の隊長たちを立て、彼らを町の門の広場に召集し、彼らに励ましのことばを与えて言った。32:7 「強くあれ。雄々しくあれ。アッシリヤの王に、彼とともにいるすべての大軍に、恐れをなしてはならない。おびえてはならない。彼とともにいる者よりも大いなる方が私たちとともにおられるからである。32:8 彼とともにいる者は肉の腕であり、私たちとともにおられる方は、私たちの神、主、私たちを助け、私たちの戦いを戦ってくださる方である。」民はユダの王ヒゼキヤのことばによって奮い立った。

ヒゼキヤが、戦いの本質をはっきりと述べました。彼らの大軍は「肉の腕」だということです。けれども、彼らと共におられるのは主なる神だ、ということです。これが旧約時代において、何度も貫かれている神の真理です。ダビデがゴリヤテに対峙した時に、彼は同じことを話しました。

2B エルサレムの神 9-23

32:9 この後、アッシリヤの王セナケリブは、その家来たちをエルサレムに遣わして、..彼自身はその全軍を率いてラキシユを攻めていた。..ユダの王ヒゼキヤとエルサレムにいたすべてのユダの人々に向かって言させた。

ラキシユは、エルサレムの南西 45 キロに位置する町ですが、ここを攻略されたら後は、エルサレムを攻め込むのは時間の問題です。

32:10 「アッシリヤの王セナケリブはこう言っておられる。おまえたちは何に拠り頼んで、エルサレムの包囲の中でじっとしているのか。32:11 ヒゼキヤは、『私たちの神、主は、アッシリヤの王の手から私たちを救い出される。』と言って、おまえたちをそそのかし、飢えと渇きで、おまえたちを死なせようとしているのではないか。32:12 あの主ではないのか。その高き所と祭壇をヒゼキヤは取り除いておいて、

ユダとエルサレムに向かい、『あなたがたは、ただ一つの祭壇の前で拝み、その上で香をたかなければならない。』と言ったのだ。

多神教者は必ず、私たちの神が排他的であるとして排撃します。日本人の反対論が決まって、「一神教は怖い、戦争をする。私たち日本人は多神教で寛容だから、戦争をしない。」というものです。何を言っているのでしょうか、天照大神を筆頭にした戦争を我々日本人は世界を相手に勃発させたのです！そうでなくとも、聖書にあるように戦争を仕掛けてくる国々はみな多神教者でありました。一神教か、多神教かは戦争に全く関係ありません。このように霊の戦いにおいて、私たちキリスト者は、イエスこそが主であるという信仰告白に猛烈な攻撃を受けます。

32:13 おまへたちは、私と私の先祖たちが地のすべての国々の民に対して、何をしてきたかを知らないのか。地の国々の神々が彼らの国を私の手から救い出すことができたか。32:14 私の先祖たちが聖絶したこれらの国々の神々のうち、どの神が私の手からその民を救い出すことができたか。おまへたちの神が私の手からおまへたちを救い出すことができるというのか。32:15 今、おまへたちは、ヒゼキヤにごまかされるな。このようにそそのかされてはならない。彼を信じてはならない。どのような国、どのような王国のどのような神も、その民を私の手から、私の先祖たちの手から救い出すことはできない。まして、お前たちの神は、おまへたちを私の手から救い出すことはできない。」32:16 彼の家来たちは、なおも、神である主とそのしもべヒゼキヤに逆らって弁舌をふるった。

次の誹りは、他の国の神々はアッシリヤから救い出すことはできなかった、というものです。これを言い換えれば、「どんな力も哲学も、科学であっても、また宗教でも、どんなことをしてもこの問題は解決しなかった。なぜあなたは、それをキリストであれば救い出すと言うのか？あなたは、そんな傲慢なことを言ってよいのか？」という挑戦であります。なぜ、イエス・キリストだけが独自に救うことができるというのか、というものです。

32:17 彼は手紙を書いて、イスラエルの神、主をそしり、主に逆らって言った。「私の手から自分たちの民を救い出さなかった地の国々の神々と同じように、ヒゼキヤの神も、その民を私の手から救い出せない。」32:18 さらに、彼らは城壁の上にいるエルサレムの民に向かい、ユダのことばで大声に呼ばわり、彼らを恐れさせ、おじけさせて、この町を取ろうとした。32:19 このように、彼らは、エルサレムの神について、人の手で造ったこの地の民の神々についてと同じように、語ったのである。

ここが大切です、神がアッシリヤの王を滅ぼすことを決められたのが、ご自分のことを他の民の神々と同じように語ったから、ということであります。主は、族長時代から、異邦人の信じる神々とイスラエルの神がいかに異なるか、ご自身が比類なき神なのかを示しながら歴史を展開させて来られました。エジプトでは、「ヤハウエは誰だ。」と言ったパロに対して、「彼が、わたしがヤハウエであることを知ろう。」と言って、ナイルで神々とされてきたものに対して徹底的な災いを下されたのです。ペリシテ人が、神の箱を自分たちのダゴンの神の宮に安置したところ、ダゴンの頭がもぎ取られて倒れており、それから腫物による裁きをペリシテ人に下されました。これは新約時代とて同じです。パウロは、アテネにおいて、神がイエスを死者の中からよみがえらせたことによって、全世界に悔い改めを呼びかけてお

られる、と宣言しました。

いかがですか、私たちは神とキリストの圧倒的な優位性を信じているでしょうか？誰でもキリストは信じることができます。けれども、この方だけが救い主だと大胆に語るができるでしょうか。神の独自の息子であると信じているでしょうか？ペテロが、石打ちの刑に処せられるかもしれない尋問を受けている時、「この方以外に派、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。(使徒 4:12)」と宣言しました。この独自性を信じるこそ、世に対する勝利なのです。「世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。(1ヨハネ 5:5)」

32:20 そこで、ヒゼキヤ王とアモツの子預言者イザヤは、このことのゆえに、祈りをささげ、天に叫び求めた。32:21 すると、主はひとりの御使いを遣わし、アッシリヤの王の陣営にいたすべての勇士、隊長、首長を全滅させた。そこで、彼は恥じて国へ帰り、彼の神の宮にはいったが、自分の身から出た子どもたちが、その所で、彼を剣にかけて倒した。32:22 こうして、主は、アッシリヤの王セナケリブの手、および、すべての者の手から、ヒゼキヤとエルサレムの住民とを救い、四方から彼らを守り導かれた。32:23 多くの人々が主への贈り物を携え、ユダの王ヒゼキヤに贈るえりすぐりの品々を持って、エルサレムに来るようになり、この時以来、彼はすべての国々から尊敬の目で見られるようになった。

列王記第二 19 章にも、イザヤ書 37 章にも証言されている、歴史的な救いです。これまでも、歴史的な救いがありました。イスラエルの出エジプトが、それです。そのことによって、神がキリストによってどのように、ご自分の民を救われるかを示しています。ダビデがゴリヤテに対して戦ったのは、キリストが肉の力をどのように滅ぼされるのか、その再臨の姿を現しています。このような記録的な救いの中に、アッシリヤからの救いがあります。イザヤ書の前半、39 章までは、この出来事を背景として神の救いが預言されています。

そして歴代誌第二では、この後の出来事も細かく説明しています。ソロモンがそうであったように、そしてかつてのヨシャパテがそうであったように、ユダの国が他の国々の注目の的となり、多くの贈り物を携えてきます。そしてこれは、再臨のキリストがエルサレムから統治を始めるに、世界中から贈り物が持ち込まれる幻ともなっています(イザヤ 60 章)。

3B 戦勝後の高ぶり 24-33

ところが、過去のユダの善い王がそうであったようにヒゼキヤも晩年における高ぶりの罪から離れることはできませんでした。

32:24 そのころ、ヒゼキヤは病気になって死にかかったが、彼が主に祈ったとき、主は彼に答え、しるしを与えられた。32:25 ところが、ヒゼキヤは、自分に与えられた恵みにしたがって報いようとせず、かえってその心を高ぶらせた。そこで、彼の上に、また、ユダとエルサレムの上に御怒りが下った。32:26 しかしヒゼキヤが、その心の高ぶりを捨ててへりくだり、彼およびエルサレムの住民もそうしたので、主の怒りは、ヒゼキヤの時代には彼らの上に臨まなかった。

ヒゼキヤが病にかかって、イザヤがあなたはもう死ぬ、と宣言を受けた時に彼が祈ったところ、主が聞いてくださいました。その治った後に高ぶりました。「恵みにしたがって報いようとせず」とあります。私たちは受けた恵みに感謝する謙虚さを忘れて、高ぶる罪を持っています。「あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配しませんように。そうすれば、私は全き者となり、大きな罪を、免れて、きよくなるでしょう。(詩篇 19:13)」

32:27 さて、ヒゼキヤは、富と誉れに非常に恵まれた。彼は銀、金、宝石、バルサム油、盾、すべての尊い器を納める宝物倉、32:28 穀物、新しいぶどう酒、油の収穫のための倉庫、および、すべての家畜のそれぞれの小屋、群れの小屋を造った。32:29 彼は町々を建て、羊や牛の家畜もおびたいたしいものであった。神が、非常に多くの財産を彼に与えられたからである。32:30 このヒゼキヤこそ、ギホンの上流の水の源をふさいで、これをダビデの町の西側に向けて、まっすぐに流した人である。こうして、ヒゼキヤはそのすべての仕事をみごとに成し遂げた。

これらの業績は全て、神に拠ることを歴代誌の著者は記しています。非常に多くの財産を与ええたのは、神です。

32:31 バビロンのつかさたちが彼のもとに代言者を遣わし、この地に示されたしるしについて説明を求めたとき、神は彼を試みて、その心にあることをことごとく知るために彼を捨て置かれた。32:32 ヒゼキヤのその他の業績、その忠実な行ないは、アモツの子預言者イザヤの幻、すなわちユダとイスラエルの王たちの書に、まさしくしるされている。32:33 こうして、ヒゼキヤは彼の先祖たちとともに眠り、人々は彼をダビデの子らの墓地の上り坂に葬った。ユダのすべての人々とエルサレムの住民は、彼が死んだとき、彼に栄光を与えた。彼の子マナセが代わって王となった。

ヒゼキヤの次にマナセが出てくる、その暗い影とも言うべき出来事が最後に書かれています。時は、西ではアッシリヤからの独立を果たしたユダがあり、東ではバビロンがいました。このバビロンに、財宝のすべてを見せたのです。神は時に、人の心の愚かさを明らかにするために、このようなことを許されます。自分が一体何を思っているのか、隠しているつもりだけれども、あることをきっかけに明らかにされるのです。そして、ヒゼキヤはバビロンに見せたことによって、この財宝がことごとくバビロン自身によって取られる日がやって来ます。